福島ユナイテッドFC

〒960-0201　福島市飯坂町筑前7-1
TEL：024-573-8203　FAX：024-573-8204　HP：http://www.fufc.jp/

写真提供：福島ユナイテッドFC

YELL Vol.19

福島県初のJリーグクラブとして活躍を続ける福島ユナイテッドフットボールクラブ（福島ユナイテッドFC）。2010年秋の経営危機による「緊急事態宣言」から新しい運営会社を設立して踏み出した矢先の2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による再びのクラブ存続危機。度重なる試練を乗り越えて、2013年悲願のJFL昇格とJ3加入を成し遂げ、復活を果たした福島ユナイテッドFCは、震災後の福島に勇気と希望を与えてくれています。今季からは松田岳夫新監督の下、さらなる飛躍が期待されます。チームの軌跡と地元福島への思いを株式会社AC福島ユナイテッドの鈴木勇人（はやと）代表＝福島市＝にお話を伺いました。

J3加入決定の電話を受ける鈴木代表＝中央　写真提供：福島ユナイテッドFC

サッカーとの出会い

―鈴木代表のサッカーにかける思い、また福島への思いは様々なメディアで報道されています。まず鈴木代表とサッカーの出会いから教えてください。

私は福島市に生まれましたが、小学校は建築士であった父の転勤の関係で仙台市立宮城野小学校へ入学しました。今、楽天のスタジアム裏にある小学校だったんです。小学3年の途中で地元の福島市立岡山小学校に転校してきました。ここで、日本女子サッカー代表の監督・高倉麻子さんの恩師でもある鈴木勝也先生から、スポーツ少年団にスカウトされたのがサッカーとの最初の出会いです。

私は小学生の頃から足が速く、転校してきたばかりでしたが運動会で活躍する場面がありました。それを勝也先生が見ていてくれて「サッカーに来いよ」と声を掛けてくれました。しかし実はその頃は体が弱くて、転校したばかりで学校にもなじめなくて。ちょっと引きこもったような状態になることもありました。サッカーも行ってはみたものの途中でやめたり、バスケットや音楽をやったりと、迷っているような時期が続きました。

5年生になってなんと勝也先生がクラス担任に。しかし、なかなかサッカーには戻れないでいたある日、教室に帰ると自分の机の上に岡山サッカースポーツ少年団のエンブレムが入った伝統のユニフォームが奇麗に畳んで置いてあったんです。憧れのユニフォームでしたけれど。最初は誰かが忘れ物をしたのではないかと思いましたが、よく考えてみると、勝也先生から「早く戻ってこいよ」というメッセージだと気づきました。自分の中にある憧れと、勝也先生の熱意に押され、サッカーの道を歩むきっかけになりました。

サッカーとの出会いから現在までを語る鈴木代表

―もしあのときに辞めていたら今の状況は全く違っていましたね。

ええ。それからサッカーに完全にはまりましたよ。あの頃、サッカーの「聖地」、東京国立競技場で毎年元旦、高校サッカー選手権の開会式と天皇杯の決勝戦が行われ、その試合を家族みんなで観戦するのが新年の始まりでしたね。

たくさんの人が笑顔でスタジアムに向かって歩いて行く。沿道にはユニフォームやグッズを売る露店の数々。競技場に近づくにしたがって気分が盛り上がっていく。白いすり鉢状のスタジアムに響き渡る観衆やサポーターの歓声のとどろき。高々と掲げられた優勝カップ。幼少時代の感動体験は今でも忘れません。あの頃はまだサッカーがメジャーなスポーツではなかったのでチケットも簡単に入手できた時代。あの感動体験が今の活動の原点になっています。大人になって「福島でもこんな素晴らしい試合が見られるような環境を整えたい。たくさんの人にサッカーの感動を伝えたい。そして街を元気にしたい！」、その思いはこの子ども時代の体験から来ています。

写真提供：福島ユナイテッドFC

サッカーか、建築か

―中学、高校と福島で、やはりサッカーを続けられたのですね？

ええ、福島第三中学校から福島東高校に進学しました。私は技術が高い方ではなかったのですが身体能力だけは高かったので、高校に入ると基本技術を徹底的に仕込まれ、技術も体も鍛えられて力を発揮していきました。東高では、原隆弘先生（現＝福島ユナイテッドFCアカデミーダイレクター）という素晴らしい指導者と出会い、先生の指導のもとで文武両道を実現しながら県内ベスト4に進出。将来はTV・スクールウオーズの滝沢先生のような泣き虫先生になってサッカーの指導をしたいという新しい夢を持つようになりました。ところが高校2年生の冬に大怪我をしてしまい、進路を考えるようになりました。設計事務所（鈴木設計事務所）を起業していた父からは「跡を継いでほしい」とは言われなかったものの、「理系から文系には行けるぞ」と促されていました。本当は建築をやってほしかったのでしょうね。

鈴木設計事務所のオフィスにならぶ数々の表彰

―大学はどうされたのですか？

散々迷った結果、サッカーと建築の両方ができる大学、千葉工業大学の建築学科に進学しました。工学部ですがプロ野球選手を排出するスポーツが有名な大学で、サッカー部は専用のナイター付き練習場がある恵まれた環境にありました。

父は明確に「サッカーをやめろ」とは私に言いませんでした。それはスポーツと建築その両方の素晴らしさを知っていたからだと思います。実は父は秋田の能代工業高校出身でバレーボールの選手、叔父は田臥選手で有名な同校バスケットボール部の選手で、実業団の秋田いすゞで活躍するなど、家族親族の中にはスポーツ選手が多くいます。

大学では、建築学科の課題に奔走しながら関東理工科系大学サッカーリーグでの優勝や得点王の獲得などを経験させていただきました。千葉県大学選抜やJリーグ柏レイソルの練習会へ参加もしましたが、やはりプロにはなれませんでしたね。小学・中学・高校・大学・社会人と全てで主将を担いましたが、大学時代は特に重要な経験をしました。私はプレイヤーでありながら、監督兼主将として全国から集った個性的な選手をまとめるというマネジメントも行う立場でしたので。

―そうしたご体験が福島ユナイテッドFCの運営にも役立っているのですね。

大学に進学して改めて、サッカーの基礎の重要性、とりわけ小学生ぐらいからの基本的な技術の獲得が非常に重要だと痛感しました。子どもたちが基本的な技術を身に付けるような環境整備や練習機会の充実は必須だと。いま福島ユナイテッドFCでも子どもたちのアカデミーチームを所有していますが、基礎作りと技術の習得、人格形成への教育が不可欠だと感じています。

ふくしま国体

―大学卒業後、福島にUターンされたのですね？

1995（平成7）年のふくしま国体候補選手として福島に戻り、父の設計事務所に入社しながら練習に参加していました。ふくしま国体では教員を中心とする選抜チームが活躍し、後に福島FCが結成されJFLに昇格します。しかしながら経営難もありチームは解散。当時は全国各地で地方のサッカーチームが盛り上がっていた時期でした。例えばアルビレックス新潟がJ2やJ1に昇格するなど、「隣県の福島でもぜひ」とサポーターの思いも高まっていただけに、非常に残念がる声が多くあがっていました。

―そこで福島市で福島夢集団が立ち上がったのですね。

福島市でサッカーを愛する若者たちと、ふくしまFMのパーソナリティをやっていた横田篤さんが中心となり、全くのゼロから2002（平成14）年に「福島夢集団」を発足。04年に「福島夢集団JUNKERS（ユンカース）」が設立されました。横田さんと元Jリーガーの時崎悠さん（07年～11年：選手、12年13年：監督）と出会い、そのときから私はボランティアで経営面や運営面での活動を手伝っていました。そんななかで尊敬していた父が不治の病で亡くなり、一時はサッカーを封印して父の築いた設計事務所の再起に必死になるなど激動の時代でした。

―「サッカーが好き」「福島が好き」という人たちで発足したチームだったのですね。

04年には福島県3部リーグへ昇格、その後06年には福島県1部に昇格。その後06年は私が選手としてプレーしていたFCペラーダの運営譲渡を受け、地元福島市出身で湘南ベルマーレや水戸ホーリーホックでプレーした時崎悠さんを選手として、元日本代表の手塚聡さんを監督として招聘し、Jリーグ参戦へと照準を合わせます。その後09年に東北社会人リーグ1部昇格、天皇杯ではJ2セレッソ大阪を破り、3回戦ではJ1横浜F・マリノスと対戦するというジャイアント・キリングを記録します。2010年、その頃、戦力も上がってきていましたが、その年の秋には、強化先行型の経営に行き詰まり、ついに経営危機のため、「緊急事態宣言」を発令する事態に陥り、一途の望みであったJFL昇格も絶たれました。ライバルであったグルージャ盛岡に最終戦のアウェーで敗れた時は「チームが負けた」というよりも「福島が負けた」という痛恨の体験をしました。

―緊急事態宣言の時には、どのようなことを考えていらっしゃったんでしょうか？

「チーム強化ばかりに気を取られ、本当にわれわれは地域と共に歩んできたのだろうか？」という根本的な問いを突きつけられ、原点に立ち返らなければならない状況に直面しました。「地域と共に歩む―それをやらないと明日はない」というのは私の中で明確でした。

そのときに脳裏に浮かんだのは、多くのサポーターやサッカースクールで学ぶ子どもたちの笑顔。「クラブは経営的に厳しい。しかしながら今解散したら、サッカーを愛するサポーターたち、そしてサッカーを続けている子どもたちの夢はどうなる？福島県からJリーグを目指すチームはもう誕生しないかもしれない」と思いました。

そこで当時支援団体として設立されていた「福島県にJリーグチームをつくる会」の中心メンバーに声を掛け、地元企業家によるクラブの存続方法を探りました。そこで立ち上がったのが福島商工会議所副会頭の後藤忠久さん（㈱後藤歯科商店代表取締役）、鈴木暁夫さん（㈱ビックマーク代表取締役）、蒲倉達也さん（福島リコピー販売㈱代表取締役社長）、鈴木宏幸さん（㈱杜設計代表取締役）、大和田利明さん（有）大和田会計事務所代表取締役）＝いずれも役職は当時＝と、私を含む6人です。それぞれのネットワークでそれ以前からスポンサーの獲得や自らの出資など、心から支援をしてきた方々ばかりです。これによって2011年2月1日に新しい運営法人「株式会社AC福島ユナイテッド」が設立されました。

新会社では地元福島の人々とのつながりをさらに太く、強くしていこうという方針が変わらないのはもちろんのこと、さらに湘南ベルマーレとの連携強化が進みました。真壁潔会長や時崎監督、竹鼻GMとのつながりからさらにマネジメントの強化へと拡大し、2013年の1月にはJリーグ初となる業務提携を湘南ベルマーレと締結。プロモーション、広告、営業、選手のスカウティングやレンタルなど様々な面で連携をし、また学び合うというような取り組みが始まっています。

Jリーグ初の業務提携を湘南ベルマーレと締結＝2013年1月　写真提供：福島ユナイテッドFC

東日本大震災の逆風からの復活

―2011年、東日本大震災が発生したのは、会社発足からわずか1ヶ月後のことでしたね。震災の後はどのように活動していらっしゃったんでしょうか。大変な状況だったと思います。

事実上、チームや選手の活動は全面的にストップ。再びクラブの解散危機に直面していました。サッカーができない状態のなか、選手達は自発的に炊き出しのボランティアを始めました。福島市内の避難所では、子どもたちがすし詰めになったような状態で、非常にストレスが溜まっていました。そのような中、「サッカーボールで遊ぼうよ」と選手たちが子どもたちに声をかけ一緒になって遊びました。「一緒に頑張ろうよ」と、励まし合いながら…。

―選手も子どもたちもお互いに支え合ったのですね。しかし長くサッカーができない状態は続きました。

ええ。でも「決して諦めてはいけない」と思う出来事が起こりました。子どもたちと一緒の時間を過ごしていたあるとき、一人の女の子が私のところに近づいてきました。「福島ユナイテッドFC、なくなっちゃうの?」と。とても悲しそうに涙目で。

その女の子は小学校の低学年ぐらいで南相馬市から避難所になっていた福島市の十六沼公園体育館で避難生活を送っていました。その頃、私は自分の娘にも同じことを聞かれたんですよね。「福島ユナイテッドFCなくなっちゃうの?もうサッカーはできないの?」と。その時に私は震えが止まらなくなったのと同時に勇気が湧いてきました。「子供たちは夢や希望を失っている。私たち大人が決して諦めちゃいけないんだ」って。

―長い間選手とフロントが地域と一緒になって活動してきた結果ですね。子どもたちが福島ユナイテッドFCのことを心配し、試合を待ち望んでいたのですね。

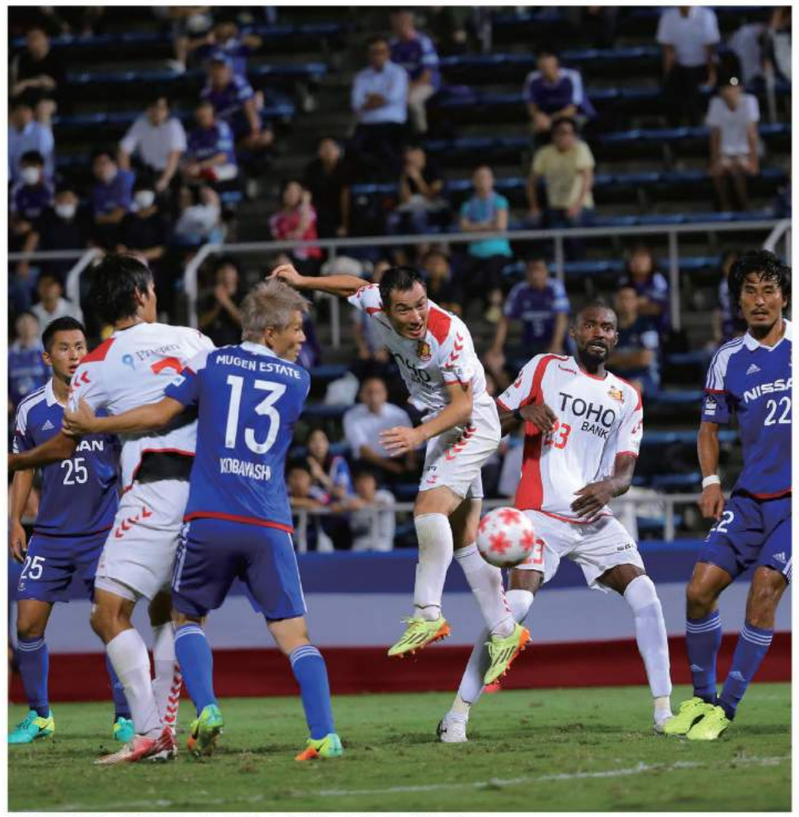
2011年5月、震災直後に代表就任を決めた際には家族や周りからの反対もありました。当然ですよね。しかし、悩みながらも「両方に取り組む。これまでも文武両道を実践してきた。両立してみせる」という大きな目標を立てました。あの女の子の言葉から、「今、諦めたらいけない。今、ここで諦めたら、『Jリーグに昇格して、何としても福島の人を元気にしたい』という目標や夢が消滅してしまう」と痛感しました。震災からの復興の中で、福島でサッカーをすることの意味や意義を考え、復興のシンボルになりたいと強く思いました。

―当時は原発事故の影響で放射能汚染もあり、屋外でのスポーツがほとんど行われていませんでしたが、どのように過ごしていらしたのでしょうか。

あの頃は一番大変な時期でした。自宅の被災や家族の反対などで7名の選手が相次いで退団しました。サッカー協会の決定により屋外での活動は中止となり、サッカースクール事業も休止。収入がないなかでホームゲームも県外で行うことに。県外遠征が続き、交通費や宿泊費などの運営費用が膨らみました。

―どのようにして乗り切られたのですか?

放射能の影響で、農作物は風評で販売が厳しくなっていました。非常に苦しい状況だったJA全農福島が「福島ユナイテッドFCの活動が地元の人の励ましになる。一緒に頑張ろう」と支援してくれることに。これで大きく息を吹き返すことができ、次々とスポンサー支援の輪が広がりました。この時も改めて自らに問いかけました。「何のためにサッカーをやるのか?」と。「それは自分のためなのか?それとも他の何かのためか?そこに希望は見出せるのか?」と。結論は、「やはり福島のためにサッカーをやるんだ。みんなが団結してこの困難に立ち向かっていくのだ」という思いを新たにすることができました。



2016年天皇杯　対横浜F・マリノス戦　写真提供：福島ユナイテッドFC

リンゴの収穫作業に協力する監督、選手たち　写真提供：福島ユナイテッドFC

―困難に直面して、真のミッションに触れたのですね。

しかし実際には本当に試合を再開できるのか、多くのスタッフが心配し気を揉んでいました。この段階でもなかなか選手が集まらない深刻な事態でしたので。しかし残ってくれた選手達と全力を尽くそうと必死の思いでした。多くの方々から「今こそ福島ユナイテッドFCがんばれ」との励ましや激励の言葉が届き、結果的には、皆さんの思いとクラブの思いがひとつになって、震災の年に東北社会人リーグ1部初優勝を成し遂げるというとんでもない成果につながりました。

スタジアムにたなびくフラッグ　写真提供：福島ユナイテッドFC

―逆境をバネにして、大きなサクセスをつかみ取りましたね。そのときの思いは。

「福島の人たちに元気を届けよう」というその一点でしたね。応援してくれる人の中には、避難先からスタジアムに駆けつけてくれる人や、チームの実情を知り懸命に声をかけてくれる人など、たくさんの福島県内外のサポーターの姿がありました。アウェーの試合では、選手やサポーターも心無い中傷の言葉をかけられることがありました。例えば「放射能が付いている」とか、「福島からは来るな」というような…。アウェーで懸命にプレーする姿でそれは違うということを分かってもらえましたし、選手もサポーターも「結果を残して福島に元気を届けるんだ」と一丸となり、震災の年の東北社会人リーグ1部優勝からJFL昇格、そしてJリーグ参入まで一気に上り詰めました。この大きな体験は、後になってからも、たくさんの人と分かち合うことができる心の復興の一つになるのではないかと思っています。

昨年夏の豪雨災害後ではサポーターに被災者支援の募金を呼び掛けた
写真提供：
福島ユナイテッドFC

松田岳夫監督
写真提供：福島ユナイテッドFC

2019年 さらなる飛躍―サポーターと共に

―最後に2019年の抱負をお伺いします。昨年末には新しいサッカースタジアム構想が発表され、また新監督就任と新たな動きが出ています。

2018シーズンは「繋がりタオす」をスローガンに、選手・スタッフ・サポーター・スポンサー一丸となって戦ってきました。福島ユナイテッドFCは私が携わった当初は7000万円の予算でしたが、多くの方々のご支援とご協力で、現在は3億6000万円まで経営規模が拡大し、スタッフも増え、クラブ環境も充実してきました。今年は9名の新加入選手を迎え、昨年よりも攻守において主導権を握り、勝利にこだわるサッカーで、よりステップアップを図ります。昨年末、新たに松田岳夫監督の就任も正式発表しました。実際にクラブにとって、ここ数年はカギとなる重要なシーズンになると思っています。震災特需が終わり平常時に戻りつつある今、ここからが本当の正念場。福島にあって良かったと思われるチームを目指し、地域の経済界、福島の人々と一緒に歩んでいきます。J2昇格の条件でもあり、また震災後の福島の多くの方々を元気にし、地域の活性化につながるスタジアム（J2基準：10,000人以上、J1基準：15,000人以上）の整備や専用練習場の確保は必須です。

スポーツは、「する」「見る」「支える」の3つの要素がありますが、当クラブは、サッカーに限らず、県内プロ3クラブ（サッカー、野球、バスケ）と連携しながら、県内におけるスポーツ文化の向上を目指し、観衆を増やし、福島でスポーツを支える人々を育てていきたいと考えています。

その活動を通じて、福島を国内だけでなく世界にも発信していきたいものです。サッカースクールも全体を底上げし、選手の育成だけでなく、指導者のレベルを上げる活動の充実を図り、日本を代表する選手の育成をはじめ、サッカーやスポーツの楽しさを伝えながら福島に貢献していきたいと思っています。

サッカーキッズの育成も進んでいる　写真提供：福島ユナイテッドFC

写真提供：福島ユナイテッドFC

写真提供：福島ユナイテッドFC

「福島ひまわり里親プロジェクト」ともコラボレーション　写真提供：NPO法人チームふくしま

サポーターの声援を受けプレーする選手
写真提供：福島ユナイテッドFC

2012年天皇杯ではJ2甲府J1新潟を破り全国16強へ
写真提供：福島ユナイテッドFC

採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujyo

プロフィール

代表：半田 真仁

福島県内の中小企業を中心に「新卒採用から教育まで」一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR・CSVを活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。

YELL
Vol.19 2019年2月
発行：採用と教育研究所
〒960-8055
福島県福島市野田町6-7-8
電話 024-529-5153
info@saiyoutokyouiku.com